児童虐待予防強化のためのシステム開発をめざした国際比較研究

大阪市立大学大学院看護学研究科 教授
横山　美江

「児童虐待予防強化のためのシステム開発をめざした国際比較研究」ということで、ファイザーヘルスリサーチ振興財団の助成を賜り研究をさせていただきました。

【ポスター -1】

研究目的です。

児童虐待の相談件数は、わが国においても年々増加しています。死亡事例も多発している状況です。児童虐待に対しては未然に防ぐことの重要性が指摘されており、予防対策の検討が急務となっています。

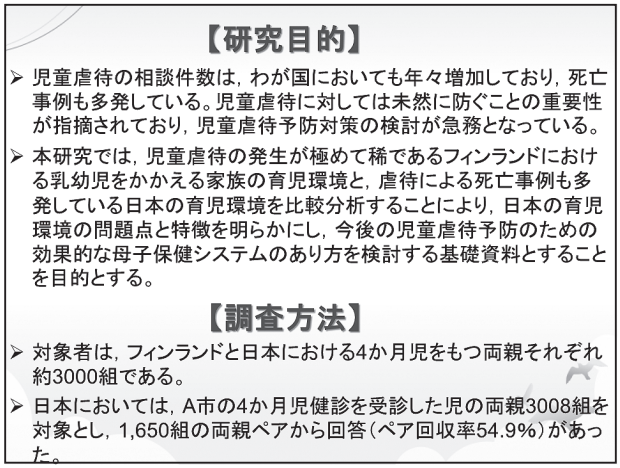
そこで本研究では、児童虐待の発生が極めて稀であるフィンランドにおける乳幼児をかかえる家族の育児環境と、日本の育児環境を比較分析することにより、日本の育児環境の問題点と特徴を明らかにし、今後の児童虐待予防のための効果的な母子保健システムのあり方を検討する基礎資料とすることを目的として、研究に取り組みました。

方法です。

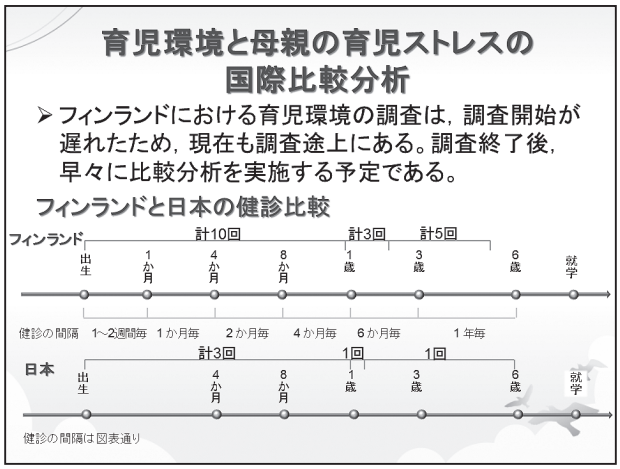
対象は、フィンランドと日本における4か月児をもつ両親それぞれ約3,000組です。

日本においては、A市の4か月児健診を受診した児の両親3,008組を対象とし、1,650組の両親ペアから回答が得られています。ペア回収率は54.9％でした。

ポスター 1



ポスター 2



【ポスター -2】

まず、フィンランドと日本の育児環境と母親の育児ストレスの国際比較分析ですが、残念ながらフィンラン

ドにおける育児環境の調査は、調査開始が遅れたために、今、データを収集している段階で、調査終了後早々に比較分析を実施する予定にしています。フィンランドで視察を行い、フィンランドでは日本の母子保健システムとかなり違うことがわかりました。新聞記事にもありましたが、フィンランドでは保健師がネオボラというクリニックでの健診を行っています。出生後から6歳までに計15回の健診をしています。日本では出生後から6歳までに5回くらいの集団健診を実施していますので、かなり違うことがわかりました。

こういうことを勘案しながら比較分析を検討していきたいと思っています。

日本での調査は終了しており、今、日本のデータを分析中です。

【ポスター -3】

「日本における父親の虐待的子育ての実態と関連要因の検討」ということで分析しました。

4か月児健診を受診し、かつ第1子が小学生以下の子どもをもつ両親を対象に、父親の虐待的子育ての実態とその関連要因について明らかにすることによって、地域の効果的な虐待予防施策を検討するための基礎資料とすることを目的としています。

対象ですが、1,650組の両親のうち、第1子が12歳以下である1,563組の両親を分析しました。

虐待的子育ての測定は、「感情的な言葉を言う」等4項目挙げています。その頻度を「全くない」を1点、「めったにない」を2点、「時々ある」を3点、「しばしばある」を4点として得点化し、4項目の合計得点を「虐待的子育て得点」として算出しています。

ポスター 3

日本における父親の虐待的子育ての実態と関連要因の検討

【目的】

本研究では，4か月児健診を受診し，かつ第1子が小学生以下の子どもをもつ両親を対象に，父親の虐待的子育ての実態とその関連要因について明らかにすることにより，地域における効果的な虐待予防施策を検討するための基礎的資料とすることを目的とした。

【方法】

対象者：1,650組（54.9%）の両親から回答を得た。このうち、第1子が12歳以下である1,563組の両親を分析対象とした。

虐待的子育ての測定：「感情的な言葉を言う」等4項目挙げ，その頻度を「全くない」を1点，「めったにない」を2点，「時々ある」を3点，「しばしばある」を4点として得点化し，4項目の合計点を「虐待的子育て得点」として算出した。

ポスター 4

表1　父母別虐待的子育て得点

	父親		母親		P値[2]
	Mean	SD	Mean	SD	
感情的な言葉	1.8	0.9	2.3	1.0	P<0.001
叩く	1.4	0.7	1.6	0.9	P<0.001
無視する	1.2	0.5	1.4	0.7	P<0.001
別室に放置、閉じ込める	1.1	0.4	1.2	0.5	P<0.001
虐待的子育て得点[1]	**5.6**	1.9	**6.6**	2.4	P<0.001

1) 虐待的子育ての4項目の合計点

2) 対応のないt検定

【ポスター -4】

表１をご覧下さい。父母別虐待的子育て得点に関して比較したものです。

全ての項目で母親は父親に比べて得点が高くなっていました。得点が高いということは、頻度が高いということを示しています。

【ポスター -5】

表２は、虐待的子育て項目における父母別と両親間の相関を示したものです。

ポスター 5

表2　虐待的子育て項目における父母別および両親間の相関

		父親				母親			
		感情的な言葉	叩く	無視する	別室に放置、閉じ込める	感情的な言葉	叩く	無視する	別室に放置、閉じ込める
父親	感情的な言葉	—							
	叩く	0.596**	—						
	無視する	0.239**	0.200**	—					
	別室に放置、閉じ込める	0.328**	0.434**	0.343**	—				
母親	感情的な言葉	0.509**	0.477**	0.108**	0.233**	—			
	叩く	0.538**	**0.671****	0.075*	0.281**	0.670**	—		
	無視する	0.285**	0.297**	0.110**	0.180**	0.456**	0.414**	—	
	別室に放置、閉じ込める	0.264**	0.321**	0.091**	0.304**	0.374**	0.431**	0.447**	—

*P<0.01, **P<0.001

ポスター 6

表3　第1子の年齢階級別虐待的子育て得点の比較

	0-1歳 (N=880)	2-3歳 (N=358)	4-5歳 (N=188)	6-12歳 (N=137)	F値	年齢別の多重比較の結果
虐待的子育て得点						
父親	4.6±1.1	6.6±1.9	7.0±2.0	7.2±2.1	266.8*	0-1歳 < 2-3歳 < 4-5歳 = 6-12歳
母親	5.0±1.3	8.3±2.1	8.9±2.0	8.2±2.1	534.3*	0-1歳 < 2-3歳 = 6-12歳 < 4-5歳

*P<0.05

ここで特徴的なのは、父親の「叩く」と母親の「叩く」で最も強い相関が認められたことです。

【ポスター -6】

表３は、第１子の年齢階級別に虐待的子育て得点を比較したものです。

母親は4歳から5歳で得点が最も高くなっていました。父親は4歳から5歳で高くなり、6歳以降も得点が高くなっていました。

【ポスター -7】

表４は、父親の虐待的子育て得点を従属変数として重回帰分析を行った結果です。

父親の虐待的子育て得点と一番関連が認められたのが子どもの人数でした。その他、父親の育児ストレス、父親の親としての役割充足感、夫婦関係、母親の虐待的子育て得点、そしてステップファミリーも関連が認められています。

【ポスター -8, 9】

まとめです。

父親は母親に比べ、子どもに対し虐待的な対応を行う頻度は低いことがわかりました。

ポスター７

表4　父親の虐待的子育て得点を従属変数とした重回帰分析結果

	β	P値
父親に関する要因		
育児ストレス	0.174	P<0.001
親としての役割充足感	−0.081	P<0.001
夫婦関係	−0.063	P=0.010
母親に関する要因		
虐待的子育て得点	0.296	P<0.001
家族に関する要因		
子どもの人数	0.353	P<0.001
ステップファミリー	0.052	P=0.017
調整済みR^2	0.431	

ポスター 8

結　　果

1）父親の虐待的子育て得点は，母親の得点に比べ有意に低かった(表1)。

2）虐待的子育て項目における相関は，父親の「叩く」と母親の「叩く」の間に最も強い相関が認められた（表2）。

3）虐待的子育て得点は第1子の年齢階級で異なり，父母とも0－1歳が最も低く，母親では4-5歳をピークに6－12歳で下がるのに対し，父親では4-5歳以降も高かった(表3)。

4）重回帰分析の結果，父親の虐待的子育て得点は子どもの人数が最も強く影響し，父親の育児ストレス，親役割充足感，父親からみた夫婦関係，母親の虐待的子育て得点，ステップファミリーとも関連が認められた（表4）。

一方で、虐待的子育ては夫婦間で影響し合うことも確認されました。

虐待的子育ては第1子の年齢と関連しており、母親は第1子が4歳から5歳である場合に最も高く、父親では4歳から5歳以降も高くなっていました。

父親の虐待的子育てを予防するためには、第2子以降の出産に伴うきょうだいへの対応も含めて父親に対する働きかけを積極的に行うことも必要だと思います。

現状の体制にあっては、父親の虐待予防を視野に入れた母親支援も必要かと思われます。

ポスター９

結　　論

- 父親は母親に比べ，子どもに対し虐待的な対応を行う頻度は低い一方，虐待的子育ては夫婦間で影響し合うことが確認された。
- 虐待的子育ては第1子の年齢と関連し，母親では第1子が4-5歳である場合に最も高く，父親では4-5歳以降も高かった。
- 父親の虐待的子育てを予防するためには，第2子以降の出産に伴うきょうだいへの対応を含め，父親に対する働きかけを積極的に行うとともに，現状の体制にあっては，父親の虐待予防を視野に入れた母親支援を行うことの必要性が示唆された。

質疑応答

会場： 1点、フィンランドの育児環境についてご質問をさせていただきたいと思います。 私もまだ十分な知識がなくてイメージなのですが、フィンランドをはじめスウェーデンなどの北欧諸国は比較的子どもを育てやすい環境にあると思うのです。出産した後に女性が仕事を休みやすい環境、社会がサポートする環境が整っている印象があるのですが、実際にフィンランドではどのようなシステムがあるのかということを教えていただければと思います。少し研究とは、ずれてしまうかもしれませんが。

横山： 母親に関してですか？　全体ですか？

会場： 全体です。

横山： 全体でかなり違うと思ったのが、父親のワークライフバランスです。フィンランドはすごいです。このような研究をしようと思ったのは、フィンランドのヘルシンキ大学と7年くらい共同研究をしており、フィンランドのシステムが全然違うということに気が付いたからです。例えば、日本ですと夜遅くまで研究をしておりますが、フィンランドは4時、5時には誰もいなくなる（帰る）という状況で、男性も家に帰って子育てをするのです。ネオボラでも1人で奥さんが来られることはなく、2人で来られています。そういう状況がありますので、日本とは全然違うのだなということを見て感じています。
そのように感じていまして、全体で比較が必要だなと思います。

会場： 私は「介護」を視点に研究をしており、フィンランドを視察したことがありました。今回は「子育て」ということですが、「子育て」は親の経済的な問題が影響するとよく言われていますよね。そういう意味で、日本とフィンランドの場合、生活費の中に占める子育ての割合というのはいかがだったのでしょうか？

横山： まだそういったところは比較できていないのですが、フィンランドは教育も医療も保健も全部無料です。大学へ行くまでも全部無料です。フィンランドはそういった社会保障が充実しています。日本は格差社会で、健康格差のことも言われていますが、そういったことは全然みられず、皆さん穏やかです。そういった点も検討したいと思っています。
もう1点、日本では結婚をキチッとされているのですが、フィンランドは結婚をされず（籍は入れず）に一緒に住んでいるという方も結構おられて、そういう中でも平和にやっておられるのですごいと思っています。

会場： 皆さんご存じのように、日本は女性の社会進出促進を、国がかなり準備不足で進めすぎていると思います。フィンランドとは全然別なライフカルチャーです。そういう中で、雇用不安、所得不安、生活不安、家族構成不安などの影響も非常に大きいので、それらの相関を調査分析されましたか？

横山： まだフィンランドの調査が終了しておりませんので。

座長： 「比較の段階でそういうことを是非考えろ」という意見と捉えてよろしいですか。

会場： はい。

会場： 両親1500組と書いてあったのですが、片親だけの世帯や片親だけしか回答しなかったものが除外されているとしたら、それは大事なものを見落としているのではないかなという気がします。

横山： そうですね。今回は両親揃っておられるところで条件設定をしてしまいましたので、そこはご指摘いただいたようなところだと思います。今後もう一度見直して、そちらも検討したいと思います。有り難うございます。